コメント

西　成彦

私自身は東ヨーロッパ地域から文学の研究を始めた人間です。要するに門外漢なのですが，それでも今日のお話は非常に身近なものとして受けとめられた気がします。私が言う東ヨーロッパとは，ウィーンとキエフの間，ハンガリーやウクライナのことですが，そこには200年前，さまざまな民族が住んでいました。彼らは共通で単一の文字言語を持ちませんでした。ある時はオーストリアが，ある時はロシアが，ある時はポーランドが，ある時はハンガリーが，ある時はルーマニアが近代国家を作り上げようと介入してきて，国民文学の枠組みの中でさまざまな文学が200年間書き綴られてきました。しかし，戦後，この55年間，この地域の国境は一度も移動していません。チェコとスロバキアが分かれたこと，ソ連邦が解体したことを除けば境界線は移動していません。現在，この一帯では，領有している国家の国語で書かれたもの以外は陽の目を見ることのむずかしい状況にあります。かつてポーランドやルーマニアで，ユダヤ人の言葉で書かれた文学はほとんど今は陽の目を見ていないのです。その状況と台湾の状況は10年前までは少なくとも似ていたと思うのです。

この10年間の台湾では，日本語で書かれたものをどういうふうに政治的に評価するかを含めた上で歴史的な変遷を踏まえながら，今までの文学史を洗い直す作業が始まったばかりだと思います。日本においても同じことです。日本文学研究はこの10年間でゼロからやり直すしかないというくらい，膨大なテキストを読み返すだけでなく，文学史記述そのものを書き改めるしかない状況にあります。垂水さんの話にも書き直しの上で十分な配慮を要する重要な指摘が含まれていたと思います。日本語文学史だけでなく台湾地域における文学史の書き直しの上でも示唆に富んだ話だと思って私は聞きました。東ヨーロッパにおいては，なかなかそういうところまで立ち入っていかない。ようやく社会主義から脱したばかりで，一国ナショナリズムの傾向が強く，もっと窮屈な状況がなお繰り広げられているという気がするのですが…。

今日の話をうかがいながら，日本の植民地支配とは何だったのかを考えずにはおれません。一つには日本化，皇民化ということなのでしょうが，もう一つ，「大東亜化」ということばが当てはまるのではないかと思います。東宝声楽隊は「大東亜化」だった。呂赫若は日本語で作品を書いた人であるだけでなく，台湾文学も書いた。彼は両方を担っている。一見矛盾するように見えますが，彼はまさに日本による植民地主義，大東亜共栄圏，八紘一宇の構想の下の一つの実態を二つの形を表す作家なのです。その際，文学の言語は基本的に均質化に向かう。一言語使用に向かっていく。逆に映像や音楽，美術はエキゾチズムを漂わせるために色彩豊かになり，アラカルト的にメニューを増やす方向に進んでいく。私にはこのことが興味深く思えてならないのです。

文学は基本的に一言語で書かれる。複数言語をおりまぜながら書かれる小説があるにしても，やはりドミナントな言語は定まっているわけです。それに対して音楽はチャイコフスキーの「くるみ割り人形」であれ「白鳥の湖」でもロシア的な旋律だけでバレエ組曲を作ると退屈しますから，チャイコフスキーはロシア的でありつづけながらも，作曲家としてはスペイン風，ペルシャ風の薬味を十分にきかせた構成力の名手でもありました。言語メディアとそれ以外のメディアは実体として異質なものであって，この点で文学にはどうしようもない不器用さがあると思います。

多言語共存地域において文学が成立するためには，何らかのドミナント言語を設定する必要があり

ます。そこではドミナント言語でない異言語は隠蔽されます。日本語に翻訳されます。部分的にはふりがなをつけるなどすることで痕跡を残すことが可能です。しかし，それはあくまでも部分的なものにとどまらざるをえない。それでも，その時代その地域にあった多言語状況を生きている人々にとって，何が隠蔽されたかは比較的可視的なわけです。ところが，内地にいる日本語しかわからない人間からすると，現実化された台湾の多言語世界が全く見えないものになってしまう。小説の不器用さとは，そういうことです。

一例として，中西伊之介という作家のことを少し紹介しましょう。『堵土(あかつち)に芽ぐむもの』という彼の代表作があります。この小説は日本語で書かれていますが，主人公の一人は，植民地生まれで，C植民地に住んでいます。Chosenの頭文字であることはすぐにわかるのですが，具体名は伏せてあり検閲を意識してあって架空の植民地の設定になっている。となると登場人物の多くは日本人ではありません。ところが彼らは東北弁をしゃべっている（笑）。朝鮮語がここでは日本語の方言に直してある。きれいな日本語だと違和感があるので，わざわざ東北弁にしている。それにはいくらか必然性があって，朝鮮や「満州」に渡った日本人はほとんど東京以西の人であり，「私はもう二度往復しましたけん，ようわかっとりますばい」という台詞にも明らかなように九州人が多いのです。さらに，この小説のもう一人の主人公として東京からやってきたインテリ男がいます。この男の周辺はきれいな標準語です。他の人たちは，きれいな標準語で，横浜から来た人たちは九州から来た人たちをばかにしている。しかしインテリの槇島が朝鮮人の農民にシンパシーを持つ中で，朝鮮語をルビを使って再現してある箇所がある。こうした処理を施すことで，この小説は一言語で書いてあるが，本来は多言語使用空間の再現であることが，わかる人にはわかる。モロに出してしまうと，日本語しか読めない読者にはわからないので隠してしまうという二枚舌を使い分けをする。しかも中西は小説の中で，違うコードを持った言語をそのまま写すことができないがゆえに，その差を消すのではなく，置き換える。日本語を標準語と方言に置き換えてしまう。C植民地とは考えようによっては内地としても読みかえられる。そんな可能性の胞子がそこには撒かれている。

台湾文学の中で，日本語で書いたものは親日的であったとは必ずしも言えない。その背後にさまざまな置き換えを配しながら，わかる人にはわかる技法がそこにおいても験されていたと思います。これからなされるべきことは，まさにそういった可能性の胞子を，今からでも遅くない，受けとめるということなんですね。日本語しかわからない読者が読んでいた日本語文学という読み方ではない，消されてしまって読めないと思っている差異が，もう一度，植民地的な多言語状況を背景に据えながら，何がどう置き換えられたのかをつぶさに見ていくことによって，台湾文学に対して今ようやくまっとうな評価が下しうるのだと，今日の話を聞いて改めて思いました。

政治的な判断をするにあたっても，親日，抗日とかいった紋切型に加えて，中国系の人たちに対する日本人の集合的なイメージとして，彼らの「したたかさ」なる紋切型の表現を人はうっかり口にしてしまったりする。今日の話でも簡単に言うと，呂赫若はしたたかな作家ということになってしまうのですが，この言葉は日本語ではいくらか差別的で，蔑んだ，素直でないというニュアンスを含んだ言い方になってしまいます。しかしそうではないのです。置き換えによってしか小説では再現が不可能な世界において，植民地の日本語作家たちはあくまでも養子として書くのです。養子は単純に従順だというのでもなく，単純に狡猾なのでもない，あくなき交渉と対話可能性の探究者なのであると考えたいと思います。

いかにして一言語の中に住みつくべきなのか？彼らはその問いに応える形でしか文章を書くことのできない存在です。そして私たちもまたそうなのだということです。